

「こんなことあったね」をテープ図に表そう

単 元	かくれた数はいくつ	対象学年	2 年
ね ら い	児童たちに身近な出来事を、逆思考を必要とする問題にすることで、問題に出てくる数量の関係を想像しやすくする。また映像や場面絵で、視覚的にとらえさせ、テープ図に表すことができるようにする。		

1 教具の作り方（次ページの資料を参照）

- (1) 児童たちの学校生活の中の出来事を取り上げ、逆思考を必要とする問題を作成する。
- (2) 例えば $A + \square = B$ のような問題の場合は、A, \square , B の3つの場面に分けた映像と、各映像と同じ場面絵を制作する。
- (3) 黒板に掲示するための拡大した問題文と、児童に配付する問題プリントを作成する。

2 学習のしかた

- (1) 「こんなことあったね」というような興味を引く出来事の画像や映像を見る。
(画像や映像がない場合は教師の話からでもよい。)
- (2) 映像化された問題文を見て、大まかに題意をつかむ。
(教師は「でも分からなかったことがあるから、一緒に考えてくれるかな？」などと言い、問題を投げかける。)
- (3) 配付された問題プリントを読み、「わかっていること」と「たずねていること」に線を引く。(教師は問題文を黒板に提示する。)
- (4) テープ図にかきこむ3つの数を「～の数」という簡潔な言葉に置き換える。
(教師は(3)(4)の活動の中で、子供の意見を聞き、問題文に書き込んでいく。)
- (5) 把握した数量の関係をもとに、テープ図をかく。

3 学習上の留意点

- ・テープ図をかかせるとき、自由な大きさでかかせるると、個々のテープ図の大きさや形がかけ離れたものになる。初めてテープ図を学習する児童たちには、出来上がるテープ図の形がある程度同じものになるようにしたい。そのため、方眼紙（ノート）にかかせるようにして、最初にかく数量のテープ図の数量を「幅〇ます分、長さ〇ます分でかく」と指定するとよい。
- ・児童たちはこれまでの学習で数図ブロックなどの具体物を操作することで、数量の関係を把握してきたため、テープ図で表すということを理解できない児童も少なくない。そのため、分からない児童にはテープ図と場面絵を比較させながら、「そこから増えたの？減ったの？」「じゃあ、どこにかけばいいかな」といった言葉掛けをしながら支援をする。



また、数量の関係と合わせて、場面絵の並べ方も考えるとよい（右上の図参照）。

4 学習の効果

- ・導入の場面で、画像や映像を使うことで、子供たちは問題に対する関心を高めることができた。また、子供たちに身近な出来事であるために、数量の関係を把握する際にも役立つと考えられる。
- ・初めて学習する内容であり、かつ逆思考のパターンが毎時間異なるため、第1, 2時間目は戸惑う子も多かった。しかし, 3, 4時間目と進むに連れ, 数量関係をテープ図に表すということを理解できる児童が多くなっていった。

5 参考資料（各時間に使用した問題文とその映像、兼場面絵）

- ① $A - \square = B$ 「おにぎりが20こありました。クラスのみんながたべたら、5このこりました。なんこたべましたか。」



- ② $A + \square = B$ 「子どもが8人あそんでいました。そこへ友だちが来たので、みんなで25人になりました。何人来ましたか。」



- ③ $\square + A = B$ 「シールをもっています。8まいもらったので、ぜんぶで24まいになりました。シールは、はじめに何まいありましたか。」



- ④ $\square - A = B$ 「おにぎりをつくりました。5こたべたら、13このこりました。おにぎりは、はじめに何こつくりましたか。」

